

HOUSE



時折、肅々として音もなく無表情に降り出した雨のように生家の面影が脳裏に忍び込んで来る事がある。

それはもう十数年も前の記憶・・・というよりは既に幻である。そのイメージに一切の実態はなく、そこで生まれ育ったという感覚さえ不明瞭で事実ではないという気さえしてくるのである。生家の記憶という物が自分にとっては幻想に近い物になっている。そのくせ涙がでる程懐かしい。もっと言えば帰りたいのである。本当に帰りたい。そう思う気持ちがこの十数年、私を距離的にも精神的にもどんと生家から遠ざけてきたのである。

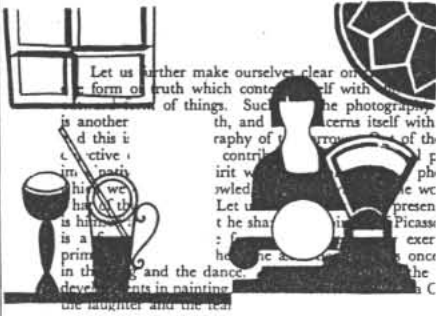
母は、その家で私を産み育ててくれた。生来病弱だった母は、次女である私が一人歩きをし始めるのを見届ける様にして亡くなった。そしてその数年後私達一家はその家を捨てた。

しかしその家はその時のままに十数年たった今もそこにある。走り抜けていく時を恨むかの様に荒れ果てながらそこにある。我が家には墓がない。たぶん嫁に行くだろう二人の娘に墓の守りはさせられないという父の配慮なのか、母のお骨は墓ではなく京都の大本山である寺の納骨堂に納められた。

私の生家は、人里離れた山中にあるのもなんでもなく、容赦なく変貌して行く町の真ん中にある。周囲の風景に昔の面影はもうない。

生家は、古い町の一隅に戦後の焼け跡の傷も癒えた頃に貸家として建てられた二階長屋の一番隅の家である。互いの天井裏はずっと繋っており、夫婦喧嘩などがあると長屋中に響き渡ったが、鼠の格好な運動場でもあった。街中だということにほんの三十年前には各家にはまだかまどがあり、井戸さえもあった。まだ皆が貧しく素朴であり隣の家に醤油を借りに行くなどか出来た時代である。私はその家の内側からいつも全てを眺めて育った。生家とはまったくそんな物だろう。小さい頃の私は母の後をついて歩いて母が御用聞きや沢鉢の坊さんや役所の人や近所の人やと玄関口でやりとりをするのを見ていた。母が縫い物などする横に坐り込んで本を読んでいた。退屈な時私はよく壁にもたれかかってぼんやりした。私は壁のひんやりとした冷たさが気に入っていた。壁を爪でひっかくと藁のような物が出てきたりして人形の腹からも、椅子の座からも同じ物が出て来るのが不思議だった。子供の頃からその家を出るまでの間、二階の床の間のある八畳間の部屋の窓の古い木の手摺にもたれかかって外の通りの様子を眺めるのが習慣だった。今思い出すとその窓からは何も見えなかったのに私はいつもそこで通りや向いの家を見ていた。その二階長屋も今ではそれぞれの住人がてんでに売り払ったりしたようで、所どころ歯抜けたようになって駐車場などになり空き地には何かしらが建ち、突然地面から生えてきたようなマンションがある。そしてその一角に住み家である事も壊される事も放棄した抜け殻のような『家』がある。

家は今の此の時の中でついに幻となった。父は、その家を今も遠くからにらみつけるように矛盾も不条理もそのままにしておきたいのだと言わばかりに生きている。



読者からの投書
先三の事、訪問先の友人宅でうっかり体談を崩して動けなくなり、何日かご厄介になった。出勤しなければならぬ友人は、寝込んでる私に黙つぶしにと『上海の長い夜』という上下二巻の本を残していった。奇しくも新聞やテレビなどでは、中国の6・4事件を国際的な大事件として連日の一面報道として扱っていた。
物語は1966年8月に始まった文化大革命の嵐の中を強く生き抜いた女性と、思想と権力を振りかざして人生を一色にしようとする上層部の戦いが描かれている。今回の事件を含めて中国の超大国である中国の歴史と神秘的ですらある空恐ろしさがひしひしと伝わって来る。
是非、お薦めしたい本の一冊です。
『上海の長い夜』(Life and death in shanghai)
チェン・ニェン著 原書房 上下二巻



Milk Hall Times 29th

A MARKET DAY

最近フルハウスでよく質問を受けるのは『一体どこでこの品物を集めるのですか?』ということですが、皆さんはこんな訳の分からない品物を一体何処で買って来るのかとても興味を覚えるようです。この訳で今回は何処でどう仕入れるのかご説明しましょう。
近い所では東京とか横浜とかのお寺の境内なんかで『ガラクタ市』と称する骨董市がそれぞれ月に一度とか二度の割合で開かれています。私達はそんな骨董市に朝一番で駆けつけるのです。それはもう東京とか関東に限らず関西とかいい物があると聞けばどこへなりと朝一番に間に合うよう夜っぴて車を飛ばして駆けつけるのです。せっかく行っても露天市ですから大雨が降ったりしたら市は中止になります。それでも露天商達はもししたら雨が止むかもしれないと、雨の中を空を見上げて待機しています。天気の良い日は暗い内から各地から来た骨董商が荷物が開かれるのを待ちかまえていて露天商のバンの扉が開くと荷下ろしを手伝いながら我々にと自分の狙いの品を見つけて交渉にかかる訳です。露天商達はお天気次第の旅まわりの商売ですからよくよいても始まらないという訳で皆なかなか気のいい連中です。大事そうに何百キロもの道のりを運んできた掘り出し物の皿も割れてもたまたま割れたことにもさげすみがあるわけ、そんな時はもう声も掛けられないくらいしょぼろしていますが、30分もすると何事も無かったように大声で仲間たちと話ながら笑っています。それでも雨がふって客足がぱったりと朝からあんまりついてなかったりすると時々やけくそになって大声でたたき売ったりして少し気が晴れるとたちまち後悔したりしてまあ忙しい人達です。
そんな気のいい露天商たちのことを少し説明しましょう。彼らは日本中の市を回っていますが、特に地は静岡より西の人達が多いようです。彼等はセリ市などで仕入れるのが多いようですが自分自身でセリ市を開いたりすると決まると『場代』とか『歩合』が入りそれはちょっとした収入になるらしくそういう人達はあまり露天では身が入らないというか、そんなにムキになって商売をしないように見えますが、骨董商仲間の顔つきには熱心です。勿論セリ市にたよってばかりだと掘り出し物はそれは巡り逢えないのです。人によりますが、大きなお屋敷が倒産が何かで家ごと売りに出るようなとき、つまり赤恥のついた物ですがそんな情報を手に入れたり、解体現場をいつも回っていたり、京都であった人は寺の住職にちょっとしたいい話を持ち掛けると国宝級の物を出してくるんだなんて自慢している人もいましたね。それぞれが独自の人と言われないようなルートがあるようです。露天商達は大体夜中の3時頃には来ています。そこで少し仮眠して薄明かりと共に起き出してそれぞれの持ち場の店開きを始めます。そうして6時には店は出来ていますが7時近くになると皆揃って居なくなってしまいます。実はこの時間帯は皆近くの喫茶店でモーニングセットを食べて行くのを大変楽しみにしているのです。関東はどちらかというと朝の遅い喫茶店が多いようですが、名古屋以西では喫茶店に早朝サービスが付き物なのです。ですから喫茶店の開く7時少し前になると皆そわそわはじめて『OOさん、モーニング行きましょう!』なんて声を掛け合っ出て出かけてしまうのです。そしてこの朝市の常連になって来るともう当然のようにこのモーニングに誘われるようになります。『△△さん、モーニング!モーニング!』の合言葉に誘われていってみると露天商たちの賑やかな座談会が繰り広げられておりここで得る情報は捨てたもんじゃありません。今回のお話はこれまでに致しますが次回には、気のいい個性的な露天商一人一人の素顔をご紹介します。お楽しみに!